



ロータリー2510地区月例報告 Vol.10

海外にいと、「海外で働くとは」、「海外で活躍するためには」という系統の本を読んでもみようという気になる。体験や経験から来る教訓や海外での生活での注意点についてまとめた本は参考になるのだが、時々、日本と海外(しかもかなり一般的に)を比較して、日本は悪くて海外の方が良いという主張をし始める本がある。今回は、僕の体験とそれらの本が主張する内容を比較してみようと思った。

1. 「日本人は世間(身近なコミュニティ)と社会(見知らぬのコミュニティ)があり、世間に含まれる人々は大切にするが、世間に入らない社会の人には冷たい。海外の人は世間などないから、見知らぬ人でも声を掛ける」これは同じ印象を持っていて、日本では、東日本大震災が起きた後でも支援品を受け取る際に秩序だつて列を作る一方、ベビーカーを階段で運ぶお母さんは誰も助けない。よく言われる他の理由としては、日本では人よりも空間を大切にすることだ。例えば電車の中で既に皆が座っていたらその状態が空間としては保たれており、席を譲るために席を立つのは場を乱すから動きにくいという説だ。満員電車の中で降りる際に手を手刀のようにして縦に動かしながら(空間を割りながら)間を歩いていく動作なども空間を意識した行動として挙げられる。これは外国の電車の中で見ることはあまりない。

2. 「海外ではスーパーやコンビニの店員は皆、入ってくるお客に対して笑顔を向けたり気軽に会話をしてくる」ある本ではこの理由の一つとして見知らぬ人に話掛ける抵抗感がないからと書いてあった。個人店であればあるほど、初対面の人に対してジョークなど軽い質問を掛けてくることがある。噂話ではあるが、スーパーの店員や客で互いに笑顔を見せあうのはセキュリティの側面があるそうだ。お客が店員に笑顔を向けるとこで悪意はないことを表現するのだそう。そのため笑顔を返さないと不審者だと思われる可能性がある。実際には、チェーン店やロンドンの中心街だと店員と客という関係性が強調され日本のように仰々しくなる感じはある。

3. 「海外の教員は学生との垣根がない」教授、准教授の先生方はいわゆるthe先生という風格がない。同じ先生が講義を多くして授業の前に立ってたとしても、学生側としては恭しい行儀作法で話しかける必要かけなければいけない、という気持ちが沸きにくい。これに関してはどうしたらこのような風土に出来るのか皆目検討がつかない。一因としては英語圏では敬語が発達してないことが挙げられる。やはり、日本では先生方には敬語を使うため、学生が話かける際には上の立場の人に話かける意識が強調されるのだと思う。けれども敬語だけで全てが説明出来るようなレベルではないと感じていて、もう今のところ文化としか僕には言えない。教授クラスの人が気軽に学生のいるパブで一緒にお酒を飲んでいる姿を見かけると非常に驚く。

4. 「人の家に行くときは贈り物を持っていくのは日本特有」そんなことはない。少なくとも欧州、ラテンアメリカから来た人だったら、パーティーを盛り上げるための食料やお酒は皆持っていき、アメリカ人はパブに行けば無限に他の人をおごり続ける。アメリカ人は欧州と比べても特殊で、他人へおごり好きの人は多いイメージがある。

今月は授業がなかったが、コミュニティが広がる出会いが多かった気がする。留学してから、見知らぬ人に声を掛けるのに慣れてきたし、イベントの後に軽い食事会などがあると、プレゼンターに話掛けるチャンスだ、と積極的に動く癖がついてきたのは成長だと自分でも感じた。少し特殊なイベントとしては、国立国際医療センターのグローバル人材センターの中谷比呂樹先生がロンドンのジョン・スノウパブに来て直接座談会をする企画があった。参加者が狙っているポストに関して何か助言がないか、中谷先生に質問をしてそれに中谷先生が答えるという会だった。その会合では次の3点は面白いなと感じた。1. 国際機関で働きたい場

合修士以上が最低条件になる。医療系の場合、修士に行く人は稀になるので足枷になる場合のあること。2. 海外の公衆衛生大学院で学んだ人のポストについて、今は日本の企業が海外進出する場合に、海外で働ける医療分野出身の人が求められ、かつ、そのマッチングについて動きがありそうということ。3. WHOの職員数は8000人程度で、同程度の規模の大学としては東京大学の教職員数となる。そのため、WHOで勤務するのは非常にハードルが高く、自分がやりたいポストのある組織は広めに取った方が良い、ということだった。また、人材センター職員の一人が「キャリアの扉にドアノブはない」と言っていて面白い表現だと感じた。チャンスとは突然降ってくるから、それに飛び付けるかどうかといていたが、個人的には自分から機会を取りに行き、扉を探してこじ開けていくというニュアンスにもなりうると感じた。

以下の写真はロンドンロータリーのフェアウェルパーティー。アフタヌーンティーを飲むだけと思ったら、ケーキやお菓子が大量に出てきた。また、世界からロータリー財団生が来ているにも関わらず、フェアウェルパーティーに集まったのは一人以外、みんな日本人だった。不思議ですね。

